

## 小説の意味について

——四つ辻のフローベール——

岩 見 至

一 小説の意味について——というとき一般には主題の探索というところである。その小説は何が書いてあるのか、作者のいふこととすることは何か等々。それで一向に差支えはないが、ここではもう少し広く、あるいは細かく考えてみたい。小説の方に力点をおけば、片や時間軸にそって小説が歴史的にどのように展開してきたかという、いわば文学史的理解に到達し、片や内包的に小説はいかなる芸術的又はその他の諸条件を含んでいるか、もしくは含むべきかといういわば小説の美学に達するだろう。意味の方に力点をおけば、ある作家のある小説が作者自身に対して、読者に対して、時代に対してもつ相互的な相関関係の理解と考えられる。(ただし以上のことは契機であってそれぞれ相互浸透的である。)ここではフローベールを素材にしてそれらの諸点に若干の考察を加えてみたい。

二 小説の歴史において、フローベールが転回点である、近代小説の始祖である、ということはほぼ定説である。それは写実主義の元祖という意味においてであった。(あつたと過去形で述べたが今は全くそれが否定されてしまったというわけではない。)いわゆる没個性、不感不動性、客観主義オブジェクティビズムという言葉を彼自身

も書簡の中でのべ、『ボヴァリ夫人』や『感情教育』などのいわゆる写実作品のみならず『サランポー』や『三つの物語』のような歴史物その他の中にも、そういうことを実践実現したとみなされる箇所は数多く見出される。ロマン派作家のような冗舌は姿を消した。作者が作品に顔を出さない。文体の宗教といわれる程に、語に句に文に刻苦した。しかもそれを読者に感知させない。「私たちは自習室にいた。すると校長が普通服をきた『新入生』と大きな教室机をかついだ小使を従えて入ってきた。」から始まり、「彼は最近レジョン・ドヌール勲章をもらった。」の結句に至る間に、愚かしい破滅に至るエンマ・ボヴァリーの女の一生が、平坦な時間の経過と共に、数々の場面の連結によりまさに写實的に描かれる。愚かしいに違いないがエンマには多少の感受性と行動への積極性(それは一時代前のスタンダールの人物ジュリアンの情熱には及びもつかないが)がみられるけれども、『感情教育』のフレデリックは更に優柔不断で、いわばとりとめもない一生(まだ死にはしないが)を過す。二月革命という激動期を含む現実の日付の入った舞台上で登場しながら、平坦な時間を流れるフレデリックの生涯が『ボヴァリ夫人』より一層比喩暗喩の少ない文章(ブルーストのいうよりフローベールらしい文章)で描き出される。写実主義は飛躍的に成熟度を増し、とみられたわけである。

三 一方でわれわれはフローベールがレアリストと呼ばれたりみなされたりのことを極度に嫌っていたことを知っている。自分が見えたいものは無に帰しての書物、主題がないか、少くとも主題が見えないような書物、宇宙空間に浮ぶ地球のように、何等の外的な支えなしに文体の内的な力によって成立する書物だということを書簡でのべていることも知っている。前節の写実主義(文

学史のきまり文句とけなされる没個性・不感不動性・客観主義)と上の事柄とは少くともストレートには結びつかない。フロベールの写実主義元祖説は、『ボヴァリー夫人』の裁判事件や当時の文壇状勢等の外的事情によって作り出されたものといつてよさそうだが、さりとて没個性云々が全く意味を失うとも考えられない。一つの形容詞一つの副詞に呻吟した、ということの意味を改めて考えなければならぬ。一般に写実主義客観主義という、我々のそとにいわゆる外界、現実世界があり、それは我々をはなれて敵としてそこにある、それをよく観察し、正確に稠密に描出すること、と考えられる。しかし実をいえばそのような事は可能であるか。写実主義というのはそもそも矛盾ではないのか。あるもの(物質的なものに限らない)をえがく、いうことは必然的に他のものをえがかないということになる。ありのままに再現するのであるから何もかも脱落させない、すべてをすくいとるのである、というであらうか。フロベールの先輩たるバルザックやスタンダールにはその点に関する楽天的信頼があった。えがいてえがかず、えがかずしてえがく、単純化のきらりがあるがそこにフロベールの苦悩や懷疑もあつたやうにみえる。

ボヴァリーの冒頭にある新入生シャルルの帽子の描写は有名である。「それはいろいろな帽子をひとつにまとめあげたような得体のしれない帽子だった。」から始まり、「帽子は真新しく庇はピカピカ光っていた。」まで十数行にわたる詳細な描写が続く。一つの事柄を九十九通りに書きわけてみせたレーモン・クノーではないが、この長い描写の代りに引用した最初の部分もしくは最後の部分でおきかえることも出来ないわけではない。無論フロベールにとってはここではこれが最善だった。いかに多くを削つて

しかも全体を描き出すかに苦心したと思われるフロベールの作品の中で、むしろ異常に長いこの帽子の描写はかえって読み手の注意をひき考えこませることになる、この帽子の象徴的な意味はいは何かと。実は帽子の描写に限らず、一つの点景、一つの場面が読み手に迷いを与える、あるいはいくつかの解釈を可能ならしめるような具合に組立てられ、しかもどの解にも作者は支持を与えないという風に仕組まれている。我々は意味づけという習癖に根深くとらわれているが、フロベールが示そうとしたのはそういう意味づけの手にある現実そのものの姿である。それは帽子とか結婚式のケーキのような個物から舞踏会の場面や農事共進会のシーン、そしてエンマの生涯そのものに至るまで一貫して意識的にそういう方向に努力してつくられたものである。ジュヌヴィエーヴ・ボレームはいう、「フロベールの景色や物は、ブルーストのそのように、私に、私の物語を語ってくれる。物が、私にある問いをかけるために意味をもった媒介としてそこにある」と。

四 『ボヴァリー夫人』からおよそ一世紀を経た頃、つまり今世紀半ばにはフランスではヌーヴォー・ロマンと称される新傾向の作家や批評家たちが現われて、フロベールに対する新しい見方を強調した。バルザック流伝統的小説家とは区別し、ゾラやゴンクールにでなくカフカやブルーストを始めとする二十世紀文学の流れに彼を結びつけようとする。内容より形式に、文章に、視点に意を注ぐもので、ものを感じとり描写するやり方として、現象学として小説をみようとする。あるいは文体の連続によって物語性をこえた現実そのものに接近を試み、人間の行動や夢を純粹な感覚描写によってイマージュ化しようとしたフロベールを評価する。

こういう「新しい」見方は実は何もヌーヴォー・ロマンをまたなければならぬというのではない。すでに早く同時代人ボードレールは『ボヴァリー夫人』が単なる写真小説でないことを見抜いていたし、その後も多くの人が、フランス以外のところでも、この作品の独自の魅力を手中にしていた。徐々に強くフロベールが見直されてきているとしても、今世紀の半ばにおいてとりわけ活潑に問題にされるといふことは言語に対する根本的な懐疑の姿勢を示す今日の時代、ということをおぼせざるを得ない。ヌーヴォー・ロマンとは限定せず現代フランスの代表的なと思われるガエタン・ピコンのフロベール観を引くならば、「フロベール小説は、自伝でもなく、人物の創造でもない。感情でも想像でもない。観察の眞実か、けつして。それは一つの世界をつくろうとする苦しい努力、人生をそのすべての現われ、その深さにしたがって反射することのできる一種の水晶体をつくるための努力である。バルザック的な意味において創造された世界でも、語られる世界でもなく、反射する世界である……」

五 反射する世界。フロベールの小説は多種多様な意味に読みとれるけれども、小説自体は何れの読みとりに対しても確かな確証を与えてくれない。それはつまるところ現実がそうであるからだといえるのだが、現にそこに在る帽子を見た者は彼自身によって意味づけをほどこざるを得ない。フロベールは、帽子自体は、あたかも何かを意味するかのよう、に、ただそこに在ることを示そうとしたといえる。読みとりは読み手の経験、現実の認識方法の反映にほかならないといえるが、しかしそれは悪しき意味での主観主義に陥ることを許すことになりはしないか。

ここで我々は参考供すべきこととしてサルトルの遡行的―前

進的と名づけられた方法を思い浮かべることがができる。サルトルの晩年の大著『家の馬鹿息子（一八二一―一八五七のフロベール）』は一九五七年の『方法の問題』において示された上記方法の具体的展開である。サルトルの人間理解の基本概念は周知のように『投企』(Projet)――状況ののりこえであるが、その性格について彼は三つの要件をのべる。第一に、のりこえるべき事件は物質的諸条件に還元不可能な幼少期で、それは性格という形で我々の内部に刻印されていること。第二に投企は用具に関する可能性（例えば一時代の文化や言語）に左右されること。第三に投企のりこえにあつては、後にくる綜合こそそのりこえられた矛盾の各項を照明し、それを理解可能にするということ。そして人間行動の意味を把握するにはデイルタイ風の『了解』を活用しなければならぬがこれが彼の遡行的―前進的方法の根幹である。了解の運動は同時に前進的（目的とする結果に向つて）でもあれば遡行的（始めの条件にさかのぼるから）でもある。より具体的には『ボヴァリー夫人』（一例である）の意味は、絶えず彼の伝記に立ちかえることによってその生涯の屈曲と連続性が明らかにになり、彼独自の投企についての仮設が確認されてゆかねばならない。フロベールのフロベールたる所以は、書くことの純粹で単純な抽象的選択でなしに、ある在り方を示す世界の中で自己表現をするためにある仕方を書くことをえらぶことであるという。

サルトルがその幼年時代に言語に関して最初の洗礼を受けたのはフロベールであった。彼に対してかなりの嫌悪感を抱きつつも、フロベールの人間とその作品に対してすぐれた理解と客観的意味づけを与えていることは「意味」の四つ辻に立つフロベールに向きあう我々にとつても大いに注目されてよいと思われる。